

声楽家

江口 輝博 さん

えぐち・てるひろ

●89年3月大阪工大高卒。大阪音大を卒業後、福祉職に携わりながら声楽の勉強を続け、06年イタリア・マルツァーイ音楽院のオーディションに合格し渡欧。奨学生に選ばれるなど同学院を首席で卒業し、現在はローマAIDA音楽院に在籍しながら数々のオペラにソリストとして出演。大阪府出身。42歳。

震災で断念したオペラ歌手の夢を実現 「人々の心を癒やす歌い手に」

阪神・淡路大震災で被災し、一度は断念した声楽家の道。しかし何事にも全力投球する情熱で江口輝博さんはチャンスをつかみ、音楽院留学のため渡欧しました。2011年にはローマフェスティバルのドニゼッティ歌劇「愛の妙薬」のネモリーノ役で主演を務めるなど、イタリアを拠点に活動を展開し、着実な一歩を踏み出しています。

VITO(振動)の愛称で親しまれる江口さんは、福祉職を経てバリトン歌手という異色のキャリアを持つ声楽家です。大阪工大高(現常翔学園高)入学時はラグビーに打ち込んでいたものの、けがを機に方向転換。もともと歌うことが好きだったことから声楽家を志望し、大阪音大へ進学しました。しかし、大学院進学の準備をして

いた時、阪神・淡路大震災の悲劇が江口さんを襲います。生活の基盤を失い、働かざるを得ない状況に。「人の役に立つ仕事をしよう」と福祉分野へ就職し、障がい者の自立支援に従事しました。

結婚して3人の子宝にも恵まれ、円満な家庭生活を送っていましたが、それでも音楽への情熱は消えません。

「3年でチャンスをつかめなかつたらあきらめる」と妻の美智代さんを説得し、37歳で単身イタリアへ留学します。「言葉もまったく分からない、住む所さえ決まっていない状態で不安もありましたが、好きなことができるとわくわくしましたね。理解してくれた家族のため、応援してくださった方々のためにも、必ず結果を出すつもりで臨みました」

ルーム・ミュージック・ファンデーションより複数年奨学金を得て、現在はローマのAIDA音楽院に在籍。2010年にブッチェーニの歌劇「蝶々夫人」のゴロー役でプロデビューを果たし、1年の大半は何らかの舞台に立つ生活に。4年間イタリアで学んで感じたのは、世界中から第一線を目指す人たちが集まり、実力に見合ったチャンスをつかめる環境だということ。「音楽院では生徒と教師が対等に意見交換していますし、舞台を楽しむ観客の反応も素直です。

いいものには感動し、良くないものには著名な声楽家であろうとブーイングする。率直な反応を肌で感じられるから面白い」。一緒に勉強している人たちも、最初は「東洋人でも歌えるのか?」という態度だったのが、昨年のトゥーシャ・オペラフェスティバルにソロで出演す

る機会があり、「演出兼主演を演じた著名なオペラ歌手に、リハーサル中にわざわざ練習を止め「テル、ブラボー!」と言ってもらったのです。それ以来、周りも認めてくれ、自分もやっていると自信を持ちました」

多くの人がプロにあこがれても、舞台に立てるのはほんの一握り。江口さんが夢を実現できたのは「今、ここを全力で生きてきたから。なりたい自分を具体的にイメージし、実践に結び付けることが大切」と語ります。福祉職に従事していた時も、人の役に立ちたい、喜ばせたいという思いは音楽に通じるものがあり、人間形成上も役立つとポジティブに考えていました。「旧知の人たちが私の音楽活動を応援するプロジェクトを立ち上げてくれたのですが、そういう縁に恵まれたのも、人とのつながりを大事にして物事に本気で取り組んできたからだと思います」

遅咲きながらも順調なスタートを切り、昨年9月には大阪市中央公会堂で、東日本大震災復興支援を兼ねた初のリサイタルを開催。高校時代の恩師、禅定佳隆(現常翔学園中学校教頭)・みどり夫妻と共に舞台に立ち、包み込むような歌声を響かせました。「被災はひとごとではありませんから、自分も何かしたかったです。また、音大進学の際に親身になってくださった禅定先生にも恩返しをしたかったですし、ずっと寂しい思いをさせてきた家族にも頑張っている姿を見せることができました。いろいろな意味で忘れられないリサイタルとなりましたね」

今後は、世界各地のオペラハウスで活躍できる声楽家为目标。国内のファンづくりを大切に、要請があればどこでも駆け付けるようにしており、現在サポーターを募集中です。「純粋なオペラファンだけを対象にするのではなく、病院や福祉施設でも行い、聴いてくれた人が癒やされるような音楽を提供していきたい。素人だった私がとりこになったように、オペラを知らない人たちにも楽しんでもらいたいです。人の声はいちばん美しい楽器ですから」と瞳を輝かせています。



オペラを熱唱する江口さん(9月17日中央公会堂)



「ふるさと」を禅定夫妻、家族、会場のお客様と共に合唱